2014年3月11日発行(創刊2002年3月31日)

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第二十六号

国見より

小池 光の 気になる日本語 15

「めちゃくちゃ」

「めちゃくちゃ」を「滅茶苦茶」ないし「目茶苦茶」と書くのはむろん当て字である。お茶になんの罪科もない。「ちゃ」と音読する漢字はほとんど「茶」しかないから、無理やりあてはめた。それの始まりは江戸時代ころだろう。

どういう意味かといえばいうまでもなく、どうしようもなく混乱したり、破損したりする様子をあらわす。

「せっかくの好意を滅茶苦茶にする」

「話の内容が滅茶苦茶である」

などというふうに使うので、程度がはなはだしくて、かつ否定的な内容を言うとき用いられる。

ところが最近、この否定的な内容というタガが外れて、ただ程度がはなはだしいとき、なんでもかんでも「めちゃくちゃ」というようになった。主に若者の使う日本語においてそうである。

「めちゃくちゃおもしろい」「めちゃくちゃ笑える」「めちゃくちゃ金持ちだ」みたいにいう。「滅茶苦茶」の語意が、それこそめちゃくちゃになってしまったわけである。

「めちゃくちゃ」がまだ程度がなまぬるいと思われる場合は、半分に切断して前半分だけ使う。この場合は「めちゃ」でなく「めっちゃ」と「っ」が入る。ここに力を溜める。「めっちゃ、おもしろい」「めっちゃ、笑える」みたいに用いて、電車の中で高校生同士の会話などを聞いていると、こういう用語がメッチャ頻発する。

ひところは程度の強調には「チョー」を冠した。「チョー」は「超」である。文字通り「スーパー」の意味である。

いつのまにかこの「チョー」が廃れたように思う。現在の若者が使う日本語にあまり登場しない。「チョー」に代わって「めっちゃ」である。「めっちゃ」がいつのまにか「チョー」を駆逐したがごとくである。

ことばは生き物だから意味も内容もどしどし変わる。変わることを誰も止められない。その変化のテンポがぐんぐん速くなってきた。昨日王座を占めたことばが今日は片隅に追いやられてゆく。そのありさまを典型的に見せてくれるのが「めちゃくちゃ」である。

むちゃくちゃ、はちゃめちゃ、めちゃめちゃなどという語もある。独立して「むちゃ」というのもある。語源はみな同一だろう。「無茶するなよ」と父親が息子に言ったりしたものだ。

何度か言われたことを思い出す。

学芸室日記

○11月3日、作家のいとうせいこうさんが来館されました。いとうさんは、東北学院大学で開催された、東日本大震災を扱った作品『想像ラジオ』の公開インタビューに出席のために来仙。被災経験がない自分に書く権利があるのかと悩み苦しみながら、この作品を発表したこと、そして発表した責任を負い続ける覚悟を伏し目がちながらも力強く話されました。そんな気の張るインタビューの翌日、当館の初代館長井上ひさしの展示を見に駆け付けてくださいました。いとうさんは「したまちコメディ映画祭 in 台東」の総合プロデューサーを務めていますが、初代館長はこの映画祭の「言い出しっぺ」とのこと。浅草で映画祭をやるならコメディに限定した方がおもしろいのではとの提案を受けたといい、その意思を引き継ぎ開催しているそうです。展示室では原稿や愛用品、写真などを懐かしそうにご覧になっていました。

○11月17日、開催中だった特別展「星野富弘　花の詩画展」のイベントに、星野富弘さんが来館されました。事前の参加希望の数は530を超え、星野さんの人気を実感。季節の変わり目でしたのでご体調が心配されましたが、星野さんは奥様と共に前日から会場の下見に訪れ、展示室では来館者の方に気さくに声をかけながら一緒に観覧されました。イベントでは、ご自身のこれまでの軌跡を映像を使って紹介。ユーモアを交えながらのお話に会場は笑い声が絶えませんでした。特別展は12月23日で終了。7500人を超える方が訪れてくださいました。

星野さん(中央)、奥様、富弘美術館館長の聖生さん

○12月14日、ライブ文学館を開催しました。12回目となる今回は、時代を越えて多くの世代から愛され続ける宮沢賢治の「セロひきのゴーシュ」のリーディングをチェロの演奏とともに味わっていただき、「宮沢賢治のおはなしシリーズ」を手がけたイラストレーターのささめやゆきさん、絵本作家のとよたかずひこさん、岩崎書店編集者の松岡由紀さんに、賢治作品の魅力についてお話いただきました。大雪にもかかわらず、当日券を求めるお客様がいつもより多く、終了後のささめやさん、とよたさんのサイン会には長蛇の列ができました。自分もお話を書いているという小学生の男の子は、最後まで熱心に絵本や物語について質問をしていました。出演者の方々、そして賢治作品の吸引力を感じた一日でした。

文学のある風景

海が見えた

いったんこうと決めてしまえば、親の言葉など聞かない子だった。東京の大学を受験する気らしいと、初めて妻から告げられたときも寝耳に水で、理由を尋ねてもはっきり言わず、ただ何がなんでも行きたいというその大学の名前を口にするだけだった。

この思い込みの激しさはいったい誰に似たのかと苦笑しながら、一馬はため息混じりに視線を転じた。駅構内と人々の混乱ぶりには、ますます拍車がかかっているようだ。

(中略)

雑踏の中、大介がホームのほうを見つめている。一馬もつられて見てみたが、雪の白さに目が痛くなった。

「何を見てるんだ」

「いや、海が」

「海?」

視線の先をたどっていくと、海が見えた。驚いた。

目を細めてホームの隙間から先を見る。中心街にあるビル群のはるか彼方で、まるで灯(あか)りをともしたように海が光っていた。

「気がつかなかったな。十年以上もここに暮らしてきたのに」

「おれもだ」

一馬の通勤の足は車だったし、大介は自転車通学で電車を利用する必要もなかったから、この駅とは縁がなかった。仙台市郊外の丘陵地にあるこの駅から、太平洋が見えるなど聞いたことはない。それとも自分が知らなかっただけなのだろうか。

息子が東京へ旅立つ日の朝、吹き荒れる風と大雪のせいで駅に足止めされなければ気づかないままだっただろう。

(三浦明博『失われた季節に』)

『失われた季節に』
(2008年　講談社)

仙台文学館ニュース　第二十六号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.sendai-lit.jp/

[表紙写真] 佐々木隆二
[印刷] (株)ユーメディア
[挿画] 古山 拓

再生紙使用 VEGETABLE OIL INK

シリーズ 私の一冊 第二十一回

本を開こう、街へ出よう。

和合亮一

大学に慣れてきた頃。詩というものとまだ、本当に出会っていなかった私であった。ふとある時に先輩に自作の詩を読ませられた。いきなりだったので戸惑ったが、言葉がとても心にしみこんでくるようで感動した。詩はとてもいいものだと思った。それからなんとなく詩が気になる様になった。書店で、ある詩の文庫本を手にしてみた。それが谷川俊太郎の詩集であった。するとそこに先輩の書いたものとそっくりの作品があった。

もとい。先輩の書いたそれがそっくりだったのだ。まさか真似して書いたのではあるまいか。だとしたら彼は卑怯者ではないか。本当に読んだ瞬間に尊敬したので、その分だけ憤りすら覚えてしまい、それを買ってすぐさま先輩のアパートへ。彼は堂々と答えた。「その通りだ。マネして書いたのだ」。あまりにも当然だという顔で応えられてしまい、二人で大笑いした。それから私の手にはその文庫本が残った。

それは集英社から出ていた谷川のアンソロジーの文庫であり、若いときの作品中心にそれは編まれていたのであったが、それをバッグにいつも入れて、電車の中や待ち時間など、開いてぽつぽつと読んでいた。猛烈に詩を書き始めるようになるまで二年の間ぐらい、こんなふうに詩に近づいたり離れたりしながら過ごしていたのである。静かに詩を読み耽っていただけの我が青春時代を懐かしく思う。

「あの青い空の波の音が聞えるあたりに／何かとんでもないおとし物を／僕はしてきてしまったらしい」。ちなみに先輩が盗んでいたものは、この「かなしみ」という詩であった。あまりにも有名な一篇で、教科書などにも掲載されているものだから、私のほうがもっと早く気づくのが本当だったのかもしれない。しかし先輩の言葉を通してからまた出会ったともいえるこれらのフレーズに、私の若い感傷の瞼は大きく開いたのだ。

「透明な過去の駅で／遺失物係の前に立ったら／僕は余計に悲しくなってしまった」。大学まで通う片道たった十分の間の列車の中の時間であったのだが、毎日揺られながら本を眺めていると、かなりのものを読むことが出来ることに気がついた。特に短い間ではあったとしても、数編の詩を何度も味わい直すのには十分であった。がたごとと揺られながら詩の言葉の一つ一つに新鮮に触れるということは、体に感応させながらそれを読もうとすることとどこか似ていた。

人生とは面白いもので、素直に詩を読む時間をちょっぴり大事にしていただけの人間が、詩を書くということを一生の仕事にしようと心に決めるようになるとは夢にも思わなかったし、谷川さんと親しくさせていただくようになるとも想像しなかった。

初めてのご本人との出会いは、自分が三十代を過ぎて、山口の秋吉台で開かれたイベントに参加するために乗った飛行機であった。その晩は一緒の朗読のステージに立たせていただいた。そのご縁から色々とつながりが生まれて、幾度もお話しをする機会をいただく様になった。ある時は、お宅にお邪魔しようと思い、阿佐ヶ谷の駅から道に迷ってしまい、慌てて交番を見つけて谷川さんの住所を尋ねたが、あっさりと断られてしまった（当たり前だ）。その前まで、ご本人に迎えに来ていただいたことがあった。彼はどうか分からないが、私にとっては

自選 谷川俊太郎詩集

『自選　谷川俊太郎詩集』（岩波文庫）

とても良い思い出となった。

これは谷川さんに限ったことではないが作者にお会いすると、その息づかいやたたずまいが作品を読んでいる時にふと隣に感じられてくるようなことがあるものだ。つい先日もお邪魔をして、対談の機会を持たせていただいたが、とても元気そうなご様子で、旺盛な執筆を続けているお姿が良く分かった。優しい面持ちの中に凛とした呼吸がいつも感じられて、独特の緊張感にいつも私は包まれるのであるが、年を重ねられてますます詩心の潔さが増している感じを受ける。

「自選　谷川俊太郎詩集」の特筆すべきところは、何よりも自分で自作を選んでいるという点にある。読み進めているうちに、そのまま〈呼吸〉がはっきりと伝わってくるようで、いくつも出ている他のアンソロジーとはどこか根本的に異なる何かが分かってくる。谷川はいつも「詩とは自分の中の無意識が書く」と語る。「どんなふうに」一篇が書き終わるか、書き始めてから最後まで分からない」とも。そのような筆先で書き上げたものがここには多く収められているように思う。「悲しみは／むきかけのりんご／比喩ではなく／詩ではなく／ただそこに在る」（「悲しみは」より）。

先輩のニセモノを通して谷川の世界に初めて出会った私だったが、言わば谷川の眼を通して今度はその内側の他人のようなものと向き合っている気持ちにとらわれてくる。そこに彼の書く〈無意識〉の秘密が大きく深く横たわっているように見える。街へと出かけていって、どこかの座席でこつこつと文庫本を開いている青年を探してみたい。

和合亮一（わごうりょういち）

1968年、福島生まれ。詩人、国語教師。第1詩集「AFTER」で第4回中原中也賞、第4詩集「地球頭脳詩篇」で第47回晩翠賞を受賞。震災後の福島からTwitterで連作「詩の礫」を発表、被災地が抱える想いを発信し続け反響を呼ぶ。これらの作品は直後から海外でも多言語に翻訳され、多くの芸術家の手により合奏曲・演劇・朗読・ドキュメンタリー映画作品として完成、世に広く送り出されている。最新詩集に「廃炉詩篇」、エッセイに「心に湯気をたてて」がある。

ことばの力を信じて「仙台朗読祭」

12月の日曜日、今年で9回目となる「仙台朗読祭」が開催されました。3分という持ち時間の中で、自作、他作を問わず、自分の好きな作品を朗読するというイベントです。音楽や鳴り物は使わず、自分の声だけで伝えるという非常にシンプルなものですが、毎年50組を超える参加者があります。名前に「仙台」とついていますが、県内はもちろん隣県の岩手や山形、福島から参加される方もいらっしゃいます。

一人一人が選び抜いた作品を味わうことができるので人気なのですが、お客様のお目当てはもう一つあります。お招きするゲスト、詩人の和合亮一さんと、フリーアナウンサーの渡辺祥子さんの朗読です。

渡辺さんは、仙台文学館ゼミナール朗読ワークショップの講師を務めていて、朗読の楽しさを伝えています。今回は「葉っぱのフレディ」を暗唱で朗読してくださいました。体の中にすっと入りこみ心地良く響く朗読に、じっと見つめながら聞く人、眼を閉じて聞き入る人様々でした。

和合さんは手がけていた「美しい帆をかかげよ」という群読と合唱のステージの台本から第二幕「鬼祭りの章」を朗読してくださいました。東日本大震災を機に変ってしまった福島の憤りのエネルギーが充ちた作品でした。宮沢賢治を意識して自分なりのことばで表現したという鬼の足音「どうた　どうた　どどどうた」がぐいぐいと畳み掛けてくる朗読に、思わず涙ぐむ人の姿も。和合さんは詩作の際、朗読する気持ちで書いているとのこと。それはとても大切で、響きのよいことばがわかってくるのだと言います。

参加者の方の朗読が、相手に届けたいという気持ちが感じられる「聞かせる朗読」になっているから、長時間に亘るイベントだけれども最後まで飽きないのだとお二人は言います。「ことばに触れるって…何か…ぬくもりに触れているんですよね」と渡辺さん。年に一回のイベントですがことばを通して様々な人々の気持ちが交わり、つながる。「仙台朗読祭」はそんなことを感じることができるひとときなのです。

企画展

「白球と青空・戦争と自由 ～井上ひさしの野球」

二〇一四年一月十八日(土)～四月二十日(日)

二〇一二年からスタートした初代館長井上ひさしの資料をご紹介する展示の第三弾。今回のテーマは「野球」です。自らも大の野球好きであった井上ひさしの小説や戯曲には、野球が描き込まれているものが少なくありません。戦後間もない時代に、野球のボールを入手するために、闇米を抱えて上京を企てる野球少年たちの波乱万丈の旅を描いた『下駄の上の卵』、盲目の天才打者・田中一郎が「野球盲導犬」であるチビと試合に出場し、目覚ましい活躍をするという奇想天外の物語『野球盲導犬チビの告白』。実業団野球のエースであった青年がC級戦犯として捕えられる運命を描く『闇に咲く花』。少年野球チームの仲間であった男たちの変わらぬ友情を描く「ナイン」…。

現在残されている創作メモ、原稿などの肉筆資料や、執筆にあたって参考にした書籍などの資料から、井上ひさしがどのように「野球」と向かい合い、作品に取り込んでいったかを探ります。

私は野球選手全員が好きなのです。

（「プロ野球はアンサンブルであってほしい」）

『下駄の上の卵』

(1980年　岩波書店)

1946年、山形県南部の小さな町に暮らす国民学校6年生の修吉たち少年の野球チーム「小松セネタース」は、里芋の茎で作った手製のボールしか持っていないため、軟式ボールを持っている裕福な少年たちのチーム「小松ジャイアンツ」に負け続けている。修吉たちは、本物の軟式ボールを手に入れ、さらに後楽園の野球試合を観戦するために東京行きを企む。皆で闇米を身体にくくりつけ、キセル乗車で東京を目指すが、仲間の一人が途中の駅で取り残されるなど次々とハプニングが起こる。修吉たちのボールを手に入れるための旅を、野球の試合になぞらえながら描いた作品。

『闇に咲く花』

(1987年　講談社)

昭和22年夏。神田の愛敬稲荷神社の神主・牛木公麿は、実業団野球のエースであった一人息子・健太郎を戦争で亡くし、近所の戦争未亡人たちとともに闇米を扱って糊口を凌いでいる。しかし、亡くなったはずの健太郎が戻ってきて、公麿を初め、人々は再会を喜び合う。健太郎は再び実業団野球への入団が決まり、和やかな日々が戻ってくるが、ある日諏訪という名の男が現れる。諏訪はGHQの任務でC級戦犯容疑の健太郎を捕えに来たのであった……。日本人の戦争責任を深く追及した作品。

球場は静かな方がいいんです。投手には捕手のミットの音がよく聞えて、その日の自分の調子が分ります。内野手も外野手もカーンという音で打球がどこへどう飛ぶか判断できるし、だいたい観衆にしても、あのカーンという音が聞えなければつまらないでしょう。ゲームの山場、球場全体が一球ごとに息をつめる。……あの静かな興奮、あれが野球の醍醐味なんじゃないのかな。

（「闇に咲く花」）

「下駄の上の卵」で少年たちが追い求めた菊型健康ボール(復刻)。従来のボールより耐久性と強度に優れた画期的なボールだった。

2013年日本シリーズで優勝した東北楽天ゴールデンイーグルスのコーナーも併設しています

＊会期中一部展示内容が変更になります。

(株式会社楽天野球団蔵)

これから開催のイベント

展示室リーディング

「下駄の上の卵」(第1章、第6章)

出演：白鳥英一(鳥屋)、高橋史生(劇団I.Q150)、斎藤大典(劇団無国籍)、瀬川まーち(劇団ウインドカンパニー)、高橋学、八尾坂彰(シニア劇団まんざら)
日時：3月23日(日)
11:00～(1章)、14:00～(6章)
4月6日(日)
11:00～(1章)、14:00～(6章)
定員：40名
会場：仙台文学館企画展示室
(展示観覧券が必要です)

トークイベント

「同窓生が語る井上ひさしの思い出あれこれ」

出演：大泉勉(宮城教育大学名誉教授)
庄子英文(庄文堂会長)
山田道幸(長生歯科医院院長)
日時：4月18日(金) 15:00～
定員：80名
会場：仙台文学館講習室

＊参加を希望される方は仙台文学館にご連絡下さい。どちらも定員になり次第受付を終了します。

井上ひさしは、野球の歴史や記録をまとめた書籍や野球の専門書、解説書などを多数所蔵していた。それらには傍線や付箋が数多く残されている。(遅筆堂文庫蔵)

豊田泰光氏から贈られた野球グッズ
豊田氏は元・西鉄ライオンズ野球選手。引退後はプロ野球解説者として活躍。井上ひさしとは、座談会などで同席して交友があった。(個人蔵)

『野球盲導犬チビの告白』

(1986年　実業之日本社)

盲目のスラッガー田中一郎は、横浜大洋ホエールズの野球選手。盲導犬チビの助けにより、音で球種を捉えて本塁打を連発し、プロ野球の打撃記録を次々に塗り替える。最強の野球チーム巨人を圧倒し、予告ホームランで物議をかもす田中をめぐるプロ野球界の陰謀、そして田中の生い立ちを盲導犬チビが語るという物語。一見すると奇想天外な作品だが、社会に根強く存在する差別の問題やスポーツと政治との関係性、プロ野球選手の労働環境などの硬派なテーマを、作者ならではのユーモアを交えた巧みな筆致で描いている。

……戦争が終わったら、いつまでも生きられる、25歳で死ぬ必要がない、という解放感。それと外で白いボールを追ったときの青い空とか、野球には何かいろんなものがいっしょくたに溶け込んでいるわけですよ。

（「プロ野球はアンサンブルであってほしい」）

こまつ座野球部
ユニフォーム
こまつ座が創設された1984年から1989年頃まで、こまつ座の「野球部」があり、座員やゆかりのメンバーでチームを組み、出版社の2軍チームなどと試合をしたりしていた。色が濃いため、夏の試合のときは暑くて大変だったという。(高橋至氏寄贈)

「下駄の上の卵」冒頭部原稿

開館15周年記念特別展

「石川啄木の世界 ～うたの原郷をたずねて」

2014年4月26日(土)
～6月29日(日)

北上川沿いの渋民公園にある啄木歌碑

今春、仙台文学館は開館十五周年を迎えます。これを記念して春の特別展「石川啄木の世界～うたの原郷をたずねて」を開催します。

二十六歳という短い生涯の中で、珠玉の短歌を数多く生み出した石川啄木。故郷の渋民村を出てから、北海道そして東京と漂泊してゆく人生を、短歌作品にふれながらたどります。

また貧困にあえぎながら、鋭敏な目を持って時代や社会の大きな変遷を論じた評論や、粉骨砕身して生み出された小説作品にも注目。日本近代文学館、石川啄木記念館のご協力のもと、写真・詩稿・歌稿・日記など貴重な資料を展示します。

井上ひさしは戯曲「泣き虫なまいき石川啄木」で、啄木と妻・節子、母・カツの葛藤を描いています。「啄木の歌が日本人の心の索引になっている」と述べた井上ひさしが、啄木を描くにあたって残した年表などの創作資料も併せてご紹介します。

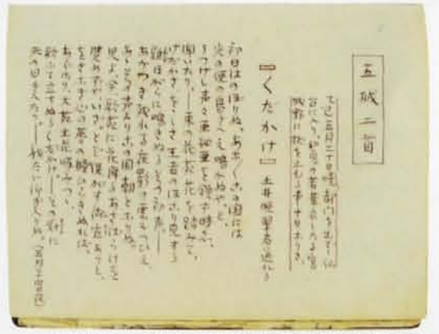
明治41年 啄木22才
(日本近代文学館提供)

啄木と宮城のゆかり

一九〇五(明治三十八)年五月、歌集『あこがれ』を出版し、帰郷する際に仙台に立ち寄っています。国分町の大泉旅館に数日投宿し、母親が病床にあることを知らせる妹からという偽の手紙を土井晩翠に送りお金を無心しました。この時、故郷の盛岡では結婚式の準備が進み、恋人・節子が啄木の帰りを待ちわびていました。

大正時代の大泉旅館
(仙台市歴史民俗資料館提供)

一九〇八(明治四十一)年四月、北海道から海路で上京する際に石巻の荻浜に寄港しました。五時間だけの滞在でしたが「此荻の浜の五時間が今年の春であつた」と日記に記しています。歌碑は一九七六(昭和五十一)年に啄木歌碑建設委員会と仙台啄木会によって建立されました。


「黄草集」ノートに収められた「くだかけ」の詩(日本近代文学館蔵)

荻浜にある歌碑。文字は啄木の歌稿ノート「暇ナ時」からとっている。

関連イベントとして、佐佐木幸綱氏の講演会や穂村弘氏と小池光館長の対談、展示室リーディングなどを予定しています。詳細は仙台文学館にお問合せ下さい。

新刊

『仙台で夏目漱石を読む』

お待たせしました。小森陽一著『仙台で夏目漱石を読む仙台文学館ゼミナール講義記録』が完成しました。『吾輩は猫である』『草枕』『三四郎』『それから』『門』について、当時の世界観や社会動向、世相などを重ね合わせて縦横無尽な読解が展開されており、何気なく読んでいた作品の行間に隠されている意味もしっかり拾い上げられています。帯にある「仙台文学館で受講者を圧倒した」という文言通り、緻密な講義の様子が手に取るように分かる一冊です。

巻末には小池光館長との対談「世界文学としての夏目漱石」も収録されており、こちらもお読みいただくと、本書をより興味深く楽しむことができます。

この本を傍らに置けば、もう一度漱石作品を読み直したくなること請け合いです。

1500円(税別)、当館の受付で販売中です。郵送販売も行っています。

新資料紹介

『婦女界』をめぐって

二〇一二(平成二十四)年、お二人の方から『婦女界』関係の資料が寄贈されました。『婦女界』は、「我が帝国の婦女諸姉に対して最も健全且つ多趣味なる読物を提供せん」との目的を掲げて同文館が一九一〇(明治四十三)年に創刊、その後婦女界社が編集発行を引き継ぎ、戦後まで出版された歴史の長い雑誌です。『婦女界』は文芸的な内容が特徴で、連載小説を重視したことで、読者が増えていったと指摘されています。

『婦女界』(第19巻第5号)

当館所蔵の一九一九(大正八)年五月号(現代生活号)の目次をみると、「私の現在の生活」といった一般読者からの投稿のほかに、泉鏡花の「美文十二ヶ月」や「挿絵小説」「絵巻物語」「映画小説」「長篇小説」「家庭小説」「歴史小説」といった読物が並んでいます。ご寄贈下さったお二人は互いに面識はないのですが、そのうちのお一人は御父上が、もうお一人は義理の御祖父様がそれぞれ『婦女界』の編集者の方で、資料は『婦女界』に寄稿していた文学者や画家からの書簡や歌稿が中心になります。東京で発行されていた雑誌に関するそれぞれの資料が、長い年月を経て、この仙台の地に落着いたというのも、不思議な巡り合わせを感じます。

それぞれの資料の年代をみてみると、年不詳のものもありますが、内容などから大正末から昭和初期、そして昭和十年代のものになります。大正末から昭和初期の資料の中には、『婦女界』一九二八(昭和三)年一月号の「諒闇あけの新春を迎ふ」というページに掲載された、柳原燁子や与謝野晶子の短歌の歌稿、三月号の「現代歌人自選恋歌集」ので紹介されている太田水穂、吉井勇、石原純、金子薫園、齋藤茂吉らの歌稿などが残されていました。また年月日不詳ですが、小説家として立つ決意を伝える岡本かの子の書簡などがありました。この書簡は元々、便箋に書かれたものですが、バラバラにならないように裏打ちされて一枚に仕立てられています。所蔵者がこの書簡を大切にしていたことが伺われます。

今後、一つ一つの資料を可能な限り『婦女界』と照らし合わせながら調べ、展示などでご紹介していきたいと思います。

好評発売中

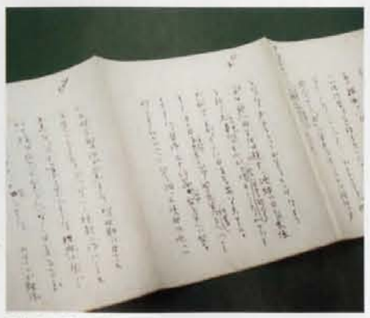
新作オリジナルグッズ

価格は3150円～9975円(税込)

絵はがきは各100円、4種類セットは350円。一筆箋は各400円(それぞれ税別)。

前号でご案内していた染色家の神田美穂さんのストールが完成しました。文学館の森の色からとったかのような、何とも言えない深みのある色合で、いばらや木の実をモチーフにしたウール製のネックピース、オーガンジー素材のストールなど全部で4種類です。一つとして同じものがありません。仙台文学館の受付前にディスプレイしていますので、ぜひご覧ください。

また水彩画家・古山拓さんのイラストによる、絵はがきと一筆箋も完成しました。誰かにことばを伝えたくなるような素敵なデザインです。手書きのぬくもりを送ってみませんか。


岡本かの子の書簡